

博士論文概要

大都市近郊における農村観光の発展とルーラリティの関係

—上海市崇明区前衛村を事例として—

呂 帥

本研究は上海市近郊の崇明区前衛村を事例に、当地の生産空間、生活空間、社会関係の3側面において、農村観光の核となるルーラリティがそれぞれどのように変化したかに着目することで、農村観光の発展とルーラリティ再編の関係性、およびルーラリティの変化メカニズムについて明らかにしている。各側面でルーラリティを評価する指標を複数設け、その変化に合わせてルーラリティの状態を「維持」、「低下」、「新規」の3種に分類していった。結果、3側面におけるそれぞれの要素は、観光客の需要と村民の生活環境向上への意識、並びに投資者および村民の観光開発への認識を背景に関連を強め、相互に作用することで、ルーラリティを再編していることが明らかになった。

キーワード：農村観光、ルーラリティ、生産空間、生活空間、社会関係

1. はじめに

(1) 研究背景

1980年代後期以降、中国においては観光需要の拡大と農村開発の需要が結びつくことで、農村観光が飛躍的に発達してきた。一方、農村地域の生態は都市的土地利用の拡大によって脆弱化していった。それに伴って景観や生活環境は変化し、農業の衰退で生じた隙間には多様な産業が現れた(Ilbery, 1998)。さらに離農化によって、農村の社会関係も変容しつつある。それらを受け、農村観光の核となるルーラリティにも再編がみられるようになっている。

(2) 既存研究

農村観光はこれまで多くの研究者によって様々な定義と解釈が行われてきた。しかし、農村観光の理論研究はまだ萌芽の段階にあり、基本的な概念に対する認識や方向性には相違がみられる(Lane, 1994; 菊地, 2008; OECD, 1994)。本研究においては、農村観光を農村地域で行われているすべての観光活動であると捉える。また、農村は今日までに職業的、景観的、生態的、社会・文化的など多様な観点から定義が試みられてきたが

(Hoggart and Buller, 1987; 張, 1998)、本研究で農村という概念の複雑さを避けるために、行政区画で「村」と規定されている行政村を研究対象とする。

都市化の進展によって農村の定義が困難となる中、ruralityという言葉が誕生し、農村の成立条件として位置付けられるようになった(龍・張, 2012; 李・張, 2015)。観光学においても、ルーラリティは農村観光商品の中心のかつユニークなセールスポイントになっているとされている(OECD, 1994)。

ルーラリティの内容について、Lane (1994)は人口密度と居住地サイズ、土地利用(農業と森林が主とするもの)と経済、伝統的な社会構成という3つの変数から認識されていると述べている。Bramwell (1994)はルーラリティを農村地域固有の土地景観、居住地、多様な人文遺産などであると指摘している。山田(2008)は「農家」、「農地」、「農村景観」の3つの視点から日本の農山村地域における農村観光の変遷を考察した。井口ほか(2008)はルーラリティの要素として生産物や栽培風景、自然環境を示している。Half-acre (1995)はルーラリティが生態的基盤と経

済的基盤，社会的基盤の有機的な相互関係のシステムによって作られていると指摘している。

本研究は地理学が空間を扱う学問であることを踏まえ、空間という観点からルーラリティの変化を考察する。生産空間と生活空間、および社会関係の3つの側面から、前述のルーラリティの考察内容を基礎として、農村観光の発展による地域の変容を考察する。

(3) 研究の目的

空間分布の特徴からみると、農村観光は都市近郊型や観光スポット近隣型、遠隔地域型の3つの類型に分けられる(肖ほか, 2001)。とくに都市近郊型の農村観光は、農村的な観光資源の他に都市からの移動距離の短さや人口の多さという好条件が揃う立地から発達しやすい。また大都市近郊における農村観光地には、ルーラリティの衰退と維持が絶えずせめぎ合っているため、そうした立地の農村観光地を研究対象とすることが重要である。

ルーラリティは農村観光の発展と農村地域における都市化の進展とともに低下しつつあるが、農村観光の核として認識されている。ルーラリティは農村地域のいくつかの基本的な要素を再編することで維持され、新たに生み出されていることもある。そのため本研究では Lane (1994) が示したルーラリティの指標とその特徴を基準として、農村観光の発展において、各指標の変化があってもそれらの特徴が維持される場合はルーラリティの維持とし、特徴と異なる方向に変化する場合は、ルーラリティの低下と判断する。ルーラリティの維持については、後述する研究対象地に従来存在しなかった施設が造られた場合、新規のルーラリティと捉える。

本研究では伝統的な農村から農村観光地に発展した上海市崇明区前衛村を取り上げ、大都市近郊の農村空間における農村観光がどのように進み、観光化された農村地域がどのような特徴を持つように至ったか、すなわち農村観光の発展に伴うルーラリティの低下と再編の実態および要因について考察し、そのメカニズムを明らかにすることを目的とする。

(4) 研究対象地域

本研究で対象とする上海市崇明区前衛村は、崇明区の北西部に位置し、上海市中心部から100 kmの距離に立地する(図1)。1993年から発

達した生態農業により、上海市都市部からの観光者が訪れるようになり、1999年以降は「農家楽」経営の展開による農村観光が発展した。前衛村における産業変化と観光業の発展プロセス、観光者数の変化などの指標に基づいて、前衛村における観光発展期間を観光萌芽期(1991～98年)と観光展開期(1999～2003年)、観光拡大期(2004～10年)、観光停滞期(2011年～)4つの時期に分ける。次章以降の分析では前述の3側面から各時期におけるルーラリティの構成要素の変化とその要因について、それぞれの指標から考察していく。分析は2014年3月と2015年3～4月の現地調査による収集したデータに基づいて展開する。

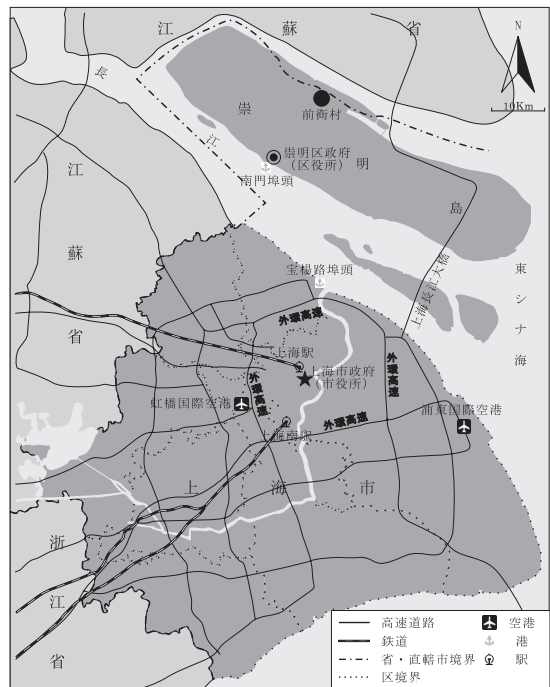


図1 前衛村の立地

2. 生産空間の観光化とルーラリティ再編

(1) 土地利用の分類

農村観光の発展により、伝統的な農業用地の利用が多様化している。本研究では席ほか(2011)や菊地(2012)の研究における土地利用の分類を参考にし、観光の機能を考慮しながら、研究対象の現状に合わせて、土地利用の分類を農的土地利

表1 前衛村における土地利用の変化(1980-2015年) (面積: ha)

	1990年	1998年	2003年	2010年	2015年
耕地	96.2	83.7	70.9	66.3	97.3
観光利用	0.0	6.8	6.8	13.5	13.5
林地	40.1	43.8	45.5	45.0	45.0
観光利用	0.0	0.0	0.0	10.8	10.8
養殖・飼育場	36.1	38.4	38.4	33.2	1.2
観光利用	0.0	3.2	3.2	0.0	0.0
水域	3.8	6.9	6.9	8.9	8.9
観光施設用地	0.0	0.9	15.5	24.3	20.5
公共用地	2.1	4.6	1.1	0.5	0.5
工業用地	1.7	1.7	1.7	1.7	1.0
宅地	16.8	16.8	16.8	16.8	16.8
その他	0.0	0.0	0.0	0.1	5.6
合計	196.8	196.8	196.8	196.8	196.8

(2014年3月と2015年3～4月の現地調査により作成)

用(耕地, 林地, 養殖・飼育場, 水域を含む, 観光対象になっている場合, 観光利用と呼ぶ)と都市的土地利用(観光施設用地, 公共用地, 工業用地, 宅地, その他を含む)の2種に分類した。各段階の土地利用の変化を表1に示す。

(2) 土地利用と農業の機能変化

1) 伝統的な土地利用と農業機能

前衛村は1970年代に干潟の埋め立て地に作られた。当初、水稻と小麦、大豆、トウモロコシを主な栽培作物とする伝統的な農業が営まれていた。1978年に「改革開放」政策が実施されてから、「郷鎮工業」が促進されたことで、村の工業が急激に発展し、1990年における工業用地は1.7haにまで増加した。また人口増加を背景に住宅が16.8haに拡大した。1990年の土地利用は耕地が96.2ha(構成比: 48.9%)、林地が40.1ha(同: 20.4%)、養殖・飼育場が36.1ha(同: 18.3%)、住宅地が16.8ha(同: 8.5%)、水域が3.8ha(同: 1.9%)、公共用地が2.1ha(同: 1.1%)、工業用地が1.7ha(同: 0.8%)という構成になっている。観光施設用地と土地の観光利用はみられなかった。農林漁業の農的な用地がおよそ9割を占めている。

この段階の農業の主な機能は農産物生産であり、あくまで生産量の追求が中心であった。農業の生産に伴う環境負担の増加についてはあまり重視されていなかった。

2) 観光萌芽期(1991～98年)

1990年代に入ると、中国では環境汚染が拡大し、人々の環境に対する意識が徐々に高まってきた。そこで前衛村では、生態農業開発企画が策定された。伝統農業から特色農業へ転換し、1993年に6.8haの無公害野菜生産基地(野菜の有機栽培)の整備が完了した。養殖業において、1993年に一部の養殖場を魚釣りセンター(3.2ha)として観光者に開放した。伝統的な魚養殖のほか、1995年には経済効果の高いスッポン養殖を開始し、孵化場と養殖場(2.2ha)が造られた。

こうした村内の整備を通じて1998年の土地利用は耕地が83.7ha(構成比: 42.6%)へと減少した。林地が43.8ha(同: 22.3%)とやや増加した。水域が6.9ha(同: 3.5%)、公共用地が4.6ha(同: 2.3%)と倍増する一方、養殖・飼育場が38.4ha(同: 19.5%)と僅かに減少した。観光対象になったものに関しては、観光利用の耕地が6.8ha(3.5%)、観光利用の養殖・飼育場が3.2ha(1.6%)であり、観光施設用地は0.9ha(0.5%)と極めて少なかった。

この時期に農業生産が生産主義からポスト生産主義へと転換し、農村の生産環境が重視されるようになったことで、副次的ではあるもののマスメディアを通じて観光機能が認識されてきた。

3) 観光展開期(1999～2003年)

この時期、中国における農村観光も盛んになり、

さらに高い収益を追求するため、前衛村は1999年により多くの観光施設を整備した。農家も住宅を活用して宿泊施設の経営を始め、日帰り観光地から滞在型観光地へと転換する傾向が現れた。2003年に前衛村の耕地が70.9ha(構成比:36.0%)へ、公共用地が1.1ha(同:0.6%)へと大幅に減少した。林地は45.5ha(同:23.1%)とやや増加し、観光施設用地は1998年の15倍超の15.5ha(同:7.9%)へと急増した。

4) 観光拡大期 (2004 ~ 10年)

観光発展に伴い、村の歴史観、民俗館、博物館など観光施設が多く整備された。それを受け、2010年における耕地は1990年の半分程度の66.3ha(構成比:33.7%)へ、林地は45.0ha(同:22.9%)まで激減し、養殖・飼育場は33.2ha(同:16.9%)、公共用地は0.5ha(同:0.3%)とやや減少した。観光施設用地は24.3ha(同:12.3%)、観光利用の耕地は13.5ha(同:6.9%)、観光利用の林地は10.8ha(同:5.5%)まで増加した。

この時期には、宿泊施設や観光対象施設の増加により、農村地域の観光機能が強化された。一方、農村観光地としての発展に伴って、観光者ニーズへ対応するために農業生産物の品目が変わり、土地利用類型に変化のないまま、土地利用の機能が観光に転換した。

5) 観光停滞期 (2011年以降)

2010年において観光業が最盛期を迎えた後、観光業が急激に転落し、それに伴い観光関連施設の経営難が顕在化するようになった。そのため、宿泊施設と娯楽施設の一部が廃棄された。また、国家の基本耕地保護政策の適応が厳格化されたことで、30haの養殖・飼育場が耕地に転換した。この時期に、廃棄されたその他の用地は5.6ha(同:2.8%)まで増加した。

6) 土地利用転換の内訳

以下、各時期の土地利用転換の内訳を分析する(図2)。1991年から1998年にかけて、観光利用への変化が最も顕著な変化として挙げられる。観光利用された用地の内訳は、耕地の観光利用が6.8ha、観光施設用地への利用が0.9ha、養殖・飼育場の観光利用が3.2haである。萌芽期には主に農業生産物が観光アトラクションであり、農業的な用地が観光的に利用されることで地域の観光

化がみられるようになった。

観光展開期には、観光利用への変化は観光施設の新設に集中している。耕地からの変化のほか、林地と公共用地からも利用された。展開期には主に人工的な観光施設が整備され、その中には都市的な要素も数多く含まれていた。

観光拡大期には、観光施設への変化がいっそう拡大し、耕地と林地、養殖・飼育場、公共用地からの変化のほか、自然的な観光対象である観光利用の養殖・飼育場も宿泊施設へ転換した。

2011年以降、観光施設の廃棄が著しくなった。

このように土地利用の側面からみると、農村観光においては農的な土地利用が観光者を惹きつけ、その中で多くのルーラリティが維持されてきた。しかし、観光の発展に伴って、都市的な観光施設の出現や農林漁業的な土地利用の観光への活用が進み、さらに農的な土地利用が都市的な土地利用へ変化するという傾向がみられるようになった。

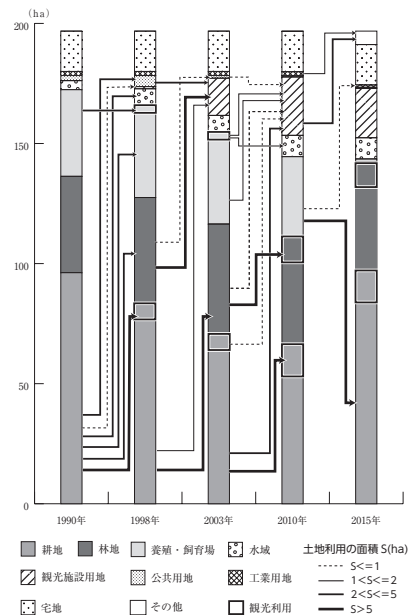


図2 前衛村における土地利用構成とその変化 (現地調査により作成)

(3) 観光活動とルーラリティの関係

1) 農業生産におけるルーラリティとローカリティ
前衛村における農村観光発展の萌芽期と展開期では、村内の農業生産物は従来から栽培品目に限

られていた。農村観光の発展に伴い、伝統的な作物である小麦と水稻の栽培面積は減少していったものの、ローカルな農業生産が維持されたことで、ルーラリティは保たれてきた。

農村観光の発展は都市部からの投資者を惹き付け、それらによる観光開発が行われた。農産物栽培においては、ブドウやイチゴといった農産物としての価値と観光対象としての価値を併せ持つものが導入された。これらは従来村内では栽培されていなかったものであり、ローカリティからの脱離と捉えられる。また観光が優先された結果、ローカリティも農業生産の特性を持たないラベンダーなどの作物が導入された。

2) 建築物の伝統性と現代性

Lane (1994) は建築物におけるルーラリティの特徴を建築物の古さと伝統性であると指摘している。実際に都市からの観光者は、農村の伝統的な建築文化や自然風景、農村生活を享受・体験することなどを望む一方、農村のインフラ設備の利便性向上と宿泊施設のアメニティの現代化を求めている。こうした伝統性と現代性を二重に消費する需要が、農村観光地の建築物、とくに生産空間の宿泊施設で伝統性と現代性を共存させる開発が行われる背景となった。また外観は現代的なものと伝統的なものに分かれているが、内装はどちらも現代的なものとなっている。客室は通常のホテルの基準で整備され、宴会場や会議室は荘厳華麗で、都市部の宿泊施設との違いはみられない。

3) 文化景観の再構築におけるルーラリティ再編と伝統維持

農村観光では都市と農村の差異が強調されるため、観光のために意図的に伝統的な文化景観を再構築することが遍在している。このように新しく作られた景観は、必ずしも真正地域文化を展示しているとはいいがたく、「農村＝伝統」という観光者のイメージに応じて再構築されたものも存在する。以下では村内の民俗館「瀛農古風園」の展示内容について分析を行う。

まず前衛村に関連する伝統的な生産・生活文化の観光化が挙げられる。観光対象として、葦と茅などで作った簡単な住居である環洞舎、また時の流れとともに姿を消した近代農村の生産・生活用具が展示されている。

次に崇明島に関連する伝統的な生産生活文化の活用が挙げられる。例えば、崇明島の歴史に沿って3つの時期に分けた展示が行われている。唐の時代に最初に砂州を開拓する様子、宋・元の時代に漁業と製塩業の発達、明・清の時代の民居の様子を模倣した展示が行われている。これらの内容はローカリティ、あるいは農村と関係しているとは必ずしもいいがたいが、村が所在する地域の伝統文化として扱えることができる。

最後に、中国に関連する伝統的な生産・生活文化の展示もみられる。例えば、伝統的な結婚式の展示が挙げられる。これは中国の伝統的な形式で、かつては農村でも都市でも行われていた。これは観光者向けに伝統的な文化を演出した商品にすぎない。

このように、村の伝統から地域または国レベルの伝統的な生産・生活文化が、観光対象として再構築されている。

4) 都市的観光施設の侵入

農村観光はルーラリティを中心とするものであるが、一般的には観光発展によって農村に多様な都市的観光要素が進入してくる。

前衛村において観光者の滞在時間を延ばすために、より多くの観光施設が整備された。その中に、ゴーカート、海賊船、ミニジェットコースターなど都市部に卓越している娯楽施設、博物館、野外研修基地、テニス場が整備された。

このように、農村観光は農的・ローカルな資源の観光利用から始まり、非ローカルな要素が農村環境を背景として展開し、農的ともローカリティとも関係していないものが造られるという変化プロセスが確認できる。

3. 生活空間の観光化とルーラリティ再編

(1) 農家楽経営の台頭と拡大

前衛村では、観光発展の展開期に拡大してきた宿泊の需要を満すため、1999年5月から農民が自宅を利用し、宿泊と食事を提供する農家楽の発展がみられるようになった。

1999年、前衛村の観光発展の実情と合わせて、農家楽を発展させる方針を定められ、村の幹部と共産党員が率先して農家楽の経営を始めた。

農村観光発展の拡大期では、生態農業と農家楽の発展によって村の知名度が高まった。特に、2004年7月27日に中国共産党中央総書記の胡錦濤氏が前衛村を訪問したことをきっかけに、村の農家楽が評価され、農家楽経営が重要な商機として村民に認識された。2004年に11軒、2005年に18軒の農家楽が新規に開業し、2010年に総数は112軒に達した。

農家楽の分布について、初期の12件は村の入り口と中央部に位置しており、これは観光者への目の付きやすさに加え、村内で身分の高い経営者の農家楽への近接性という観点から説明できる。そして2000～03年に開業されたものについては、初期経営住宅を中心に近隣へと広がった。この分布は施設立地の集積の効果を狙う立地行動として、農家の対応を評価できる。また、近隣は空間距離の近さだけではなく、その親戚ないし親しい関係であることが予想され、そうした社会関係ゆえに既存経営者の収入についての情報やアドバイスを獲得しうる立場にあったと推測できる。2004年以降の農家楽は、村中心部で早い段階に開業した農家楽の周辺に拡大した一方、村の入口から観光区の入口まで、そして観光区の出口から村入口までの道路に沿って展開してきた。

経営規模をみると、前衛村の117軒の農家楽のうち、72%は客室数が10室以下である。6室以下は47軒もあり、全体の40%を占める。このように農家楽の経営規模に関して、ルーラリティは基本的に小規模経営によって特徴付けられているが、一部では大規模経営も出現している。

(2) 居住空間の変化

1) 住宅外観の変化

1980年代までは、前衛村では多くの村民が貧しかった。家屋も小さく、低かった。ほとんどの家は一階建てで「独棟頭」と呼ばれる一字形の長屋であった。基本的な間取りは、中央の入口空間である厨房と両側にある東屋、西屋と称される寝室の左右対称形式で構成される。寝室の一部は食糧などを貯蓄する場所として使われることが多い。家の両側と裏には、トイレや家畜小屋など小規模で補助的な簡易施設がある(写真1)。

1980年代後半に入ると、改革開放政策の実施に伴い村民たちの経済力が向上し、経済的な余裕

が生じた。中国国内の他の農村地域と同様に、前衛村の村民たちも西洋式住宅である「小洋楼」(写真2)という新しい住宅を建て始める。このように、農村自身の発展によって、農家の家屋が主に1階建てから2～3階建てへと変化し、基本的には2室以上の空き部屋が出るようになった。このような空き部屋の存在は、「農家楽」の営業のために必要不可欠な条件となった。

2000年代以降、経済力がいっそう向上した村民は外部との交流が増加し、その影響を受けたことで住宅を建造する際の要求水準も高くなった。この時期、「別荘」と呼ばれる西洋風の住宅が豊かな生活の象徴として中国で流行し、村内にも同様の傾向がみられるようになった(写真3)。



写真1

写真2

写真3

注：これらの写真は各時期の代表的な家屋の様子を示したものであり、同一の建物ではない。

(2014年 3月 筆者撮影)

このように前衛村では経済発展に伴い、村民が居住空間の利便性とアメニティを追求するため、小規模で古い住宅を新しい現代的な建築に変えていった。この現代的形式の住宅は伝統から乖離しているものではあるものの、現在の都市部に集中する狭小な住居と異なる形式を有し、生活環境も良好なため、都市からの観光者にとっては一種のアトラクションとなっている。建物の外観から見ると、新規のルーラリティとして認識される。

2) 間取りと内装の変化

一般家屋での農家楽経営は、都市部からの観光者の需要に徐々に応じられなくなり、様々な問題が生じるようになる。その中の一つとして、多数の観光者が宿泊する場合のトイレ不足がある。また宿泊施設のアメニティを向上させるため、政府の勧誘と指導も重要な役割を果たした。農家楽経営者はそれに従って住宅の間取りを改装したため、住宅のルーラリティ低下に拍車がかかった。しかし、この変化は現代生活で求められる利便性

を満たし、従来の農村住宅におけるネガティブな要素を解消する側面もあったため、農村観光においてはポジティブな効果をもたらした。

また家屋の内装と設備変化について、都市部のホテルを模倣したフロントの整備、客室の装飾、テレビやベッド、サイド・テーブル、ハンガー、エアコンの設置のほか、キッチンの衛生状況の改善と機能分化に拡大・区分けが行われた。

3) 庭の変化

客室が多いほど、多くの観光者を受け入れることが可能であり、現金収入が増えるため、客室の増築意欲が高まった。さらに農家楽経営により収入が増加すれば、家屋の拡張に必要な資金も準備できる。小規模さはルーラリティの一つの特徴ではあったものの、農家楽経営者が自分の庭を利用して、増築するケースも多々みられた。

前衛村の農家は広い宅地を有しており、宅地の北側に母屋、南側に菜園、母屋の側に家畜小屋を配置するのが一般的であった。菜園では、自家用の野菜を栽培していた(図3)。しかし観光者の増加に伴って、農家はより多くの客室を確保するため、自家用菜園を客室と食堂の増築に転用するケースが増えた(図4)。こうした増築によって従来農家の庭でみられた自然風景が減少し、ルーラリティが低下した。

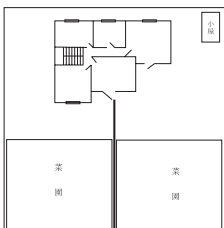


図3 増築前の一例

(2015年3月の現地調査より作成)



図4 増築後の一例

(3) 集落景観の変化

1) 建築景観の商業化

農村生活空間は村民たちの生活と休暇の場であり、伝統的に商業が発達することはなかった。また農村は閉鎖的な空間であり、村民が互いのことをよく見知っている。それゆえ都市部で商業宣伝に頻繁に利用される看板が、かつての農村集落には存在しなかった。

前衛村において、農家楽経営が開始した当初では、経営者個人には宣伝の意識もなく、看板が設置されることはなかった。しかし、農家楽の個人経営が急増してから、競争が徐々に激しくなり、一部の農家楽経営者が観光者に積極的にアピールするために看板を設置した。また前衛村の農家楽経営が発達して観光者が急増してからは、都市部にある広告会社がそれを商機と捉え、大規模な農家楽経営者に設置交渉を開始した。このように設置された看板は都市部で流行しているものと全く同様であり、建築景観の商業化と都市化が強く反映されていることがみてとれる(写真4)。



写真4 現代的な農家楽の看板
(2015年3月 筆者撮影)

2) 道路景観の変化

道路は生活空間の重要な構成部分であり、その景観も地域の発展に伴って変化しつつある。インフラの指標について、ルーラリティも未整備と認識されている(Lane, 1994)。前衛村にも当初は未舗装の道路が整備され、道路の両側にはメタセコイアが街路樹として植えられた(地表には自然に草が生い茂っていた)(写真5)。農村観光の発達以降、修景のために都市部の街路樹景観が模倣され、上海市内でよく見られるクスノキ、ハクモクレンなどに植え替えられた。低木も植えられ、立体的な植物景観の階層区分ができた(写真6)。自然景観が変化した他に、人工的で都市的な要素も流入した。観光者の夜間移動の安全性と利便性を考慮して、街路灯が設置された。これには前衛村の生態村の名称に応じて、ソーラーランプが利用されている。灯柱には観光宣伝の看板が掛けられ、下には衛生管理のためのごみ箱も設置された。

このように、生活空間の観光化の発達に伴い、ルーラリティは道路景観の要素において変化し、新しい農村景観が現れている。



写真5 観光化以前の景観 写真6 現在の道路景観
注：この2枚の写真は同じ道路で、前衛村と隣接する村の境界を双方から撮ったものである。写真5は隣接する村の道路で、観光化以前の前衛村の道路景観と同様である。写真6は現在の前衛村の道路景観である。(2015年3月 筆者撮影)

3) 公共空間の再構築

前衛村における公共空間は、主に行政機能を果たす村民委員会の建物、穀物を脱穀する場所、レジャー広場の村民生産・生活用空間であった。

観光化の進展により、新しい村民委員会の役所が新たに設置され、同時に観光サービスセンターと駐車場も整備された。また旧村の役所と廃棄された脱穀場に宿泊施設が整備され、村民用のレジャー広場が観光者のために開放された。

このように伝統的な村民の生産・生活用の公共空間が観光者向けの公共空間に拡大したほかに、村民が利用していた公共空間も農村観光の発展に

伴って観光施設が集積する観光空間に変化した。

4. 社会関係にみるルーラリティ再編

(1) 職業と収入構成の変化

都市への出稼ぎや農村における工場建設、観光開発など非農業的産業の拡大によって、農民の就業構造にも変化が生じた。農村観光が提唱された重要な目的の1つは農村地域の経済向上であるため、このような経済構造の変化は当然注目すべき研究課題である(呉羽, 1999; 杜, 2006; 森下・宮崎, 2008)。

1) 職業構成

伝統的な農村において、農業経営は極めて重要な地位を占める。前衛村においても、1980年代までは村民の大半が農業や漁業に従事していた。

しかし農村観光が始まると、観光産業への就業が増加した。2015年における前衛村の村民職業構成は、農家楽を専業とする村民が123人(32%)と最も多かった。兼業で農家楽を経営する村民の勤務先をみると、村内に勤務する村民が65人(17%)で、村外に勤務する村民が35人(9%)となっている。他には農家楽を経営しておらず、前衛村内で勤務している村民は37人(10%)となっていた。

2) 家庭の収入構成

先述した職業構成に基づき、前衛村における農家の収入状況を、農家楽経営の参入および専業者の有無を考慮して、4種に分類した(表2)。

表2 前衛村における農家の農家楽経営類型と収入状況(2015年)

類型		収入状況		戸数	割合(%)
A	家族全員農家楽経営	A1	農家楽経営	27	17
		A2	農家楽経営 < 補償金	8	5
B	農家楽専業経営者いる	B1	農家楽経営 > その他	12	8
		B2	農家楽経営 < その他	18	11
C	農家楽専業経営者いない	C1	農家楽経営 > その他	7	5
		C2	農家楽経営 < その他	30	19
D	農家楽経営しない	D1	村内勤務	13	8
		D2	村外勤務	15	10
		D3	年金・補償金	27	17
合計				157	100

A1型は大規模な農家楽を積極的に経営している農家である。A2型のほとんどは高齢者で、農家楽を専業しているが、低収入である。

B1型は家族全員が宿泊産業に従事しているわけではないが、積極的に経営に取り組むことによって、農家楽経営の収入が主な収入源となっている。B2型はA2型と類似しており、積極的なマーケティングは行っていない。村からの土地補助金と年金などで生活している。

C1型では専業経営者はいないが、経営規模が大きく集客能力もあり、農家楽経営の収入がメインとなっている。C2型は最も多く、農家楽を兼業しているが、収入は低い。

D型は農家楽を経営していない農家のグループである。この中で最も多いのはD3型であり、全員が60歳以上の高齢者である。仕事には従事しておらず、年金と補助金だけで暮らしている。

(2) 人間関係の変化

1) 村民関係

従来の村落社会は小規模な地域社会であるため、村民の活動領域が複雑に絡み重層化し、個人が村民間で様々な役割を演じている。人間関係が希薄な都市部に比べ、農村の民俗は純朴であり、この純朴さや村民の友好性、優しさ、誠実さに基づいた人間関係は観光者に対して重要なアトラクションとなっている。前衛村では、1980年代以前の伝統的な農業時代、1980年代からの工業時代においても、村民たちの間ではそれほど衝突も起こらず、親密な関係が維持されてきた。

しかし、農村観光が発達してきた1990年代以降、とくに農家楽経営が拡大してからは状況が変化した。観光による利益獲得が村民の共通目標となり、それまで存在しなかった村内での競争が顕在化し、村民間に経済的な関係が介在するようになった。そして、経営者間での「紹介」と客引きという現象がみられるようになった。

「紹介」とは、予約数が多い農家楽経営者が観光客を他の経営者に自発的に紹介し、紹介費を徴収するというものであり、一般的に親戚または近所の経営者間で発生する。この点で、血縁や地縁に基づいた親密な人間関係という伝統的な農村の特徴が農家楽経営においても表れているといえる。客引きして観光客を自分の農家楽に招く農家もあ

り、村落の伝統的かつ親密な関係ないし親戚関係にひびが入り、軋轢が生じるようになった。

2) ホスト―ゲスト関係

Lane (1994) は都市観光のアノニマスな関係に対して、農村観光はパーソナルな関係に基づくホスト―ゲスト関係が特徴であると指摘している。従来、農村観光はオルタナティブ・ツーリズムの一種として考えられ、小人数での能動的な行動形態であるとされてきた。これを踏まえれば、その交流を可能にする基盤は小規模な観光者への対応だと考えられる。

前衛村の場合でも、農家楽発展の初期段階は、受け入れ観光者数が10人以下の小規模な経営が中心となっていた。この段階では、観光者と経営者はそれぞれ互いの生活に好奇心を持っていた。こうした少人数グループへの応対を通じて、観光者と経営者の間に交流が生まれ、それ自体が重要な観光の経験になっていた。

農村観光の拡大期に入って以降、前衛村の農村観光はオルタナティブ・ツーリズムからマス・ツーリズムに変化しつつある。多くの観光者が来訪し、とくに観光繁忙期には大規模な農家楽は一日に何百人という数の観光者を受け入れることもある。経営者と観光者との交流が難しくなり、農村観光のホスト―ゲスト関係はパーソナルなものからアノニマスなものへと変わりつつある。

また行き過ぎた経済的利益追求の弊害として、観光者に対する詐欺紛いの行為も現れている。

3) ソーシャル・ネットワーク

伝統的な農村では、人々は相対的に閉鎖的な農業社会で生活し、親縁関係が社会交流の主な基盤であったため、ソーシャル・ネットワークは極めて単純であった。しかし農村観光の発展により、村民たちは異なる地域から訪れてきた観光者と接触することが可能となった。観光者は地域も職業も異なるため、交流を通じて村民たちのソーシャル・ネットワークが次第に拡大していった。そこで、外来の観光者の増加に伴って、従来の閉鎖的なソーシャル・ネットワークは、商業関係に基づくソーシャル・ネットワークへと拡大し、村民の視野を広げることに繋がった。

(3) 生活習慣の変化

1) 勤務時間

村民たちの勤務時間を図5に示す。伝統的な農村では、農産物生産が労働の中心であったため、村民の生活は農事期に合わせたものになっていた。前衛村においても1980年までは、農産物の収穫を目的とする生産活動が主であった。主要生産物は水稲と小麦、トウモロコシ、菜種などであり、現地の気候条件に応じて、二毛作が行われることが多かった。この夏季に行う収穫、播種、施肥の「三夏農忙」と、秋の収穫、裏作の播種、施肥の「三秋農忙」が繁忙期となっていた。

1980年代に入ると、前衛村に工業が導入され、村民は都市部の工場勤務者と同様に年間を通じて働き、繁忙期と休暇期の区別が付かなくなった。

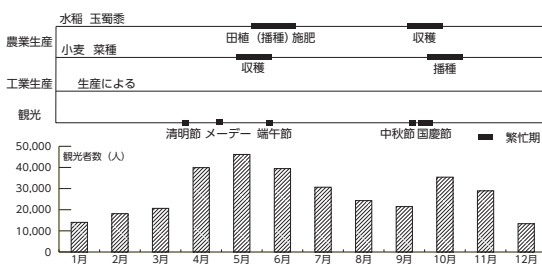


図5 前衛村における村民の労作繁忙期の変化

1999年から、観光業に参入した村民が多くなり、村民たちの生活は農村観光に強く影響されるようになった。「清明節」と「メーデー」、「端午節」、「中秋節」、「国慶節」の連休が繁忙期になっている。この祝日や長期休暇による休日制度の変動が都市観光にも類似した変動パターンが示されている。

また大きな特徴として、農村観光の発達に伴い村民の職業が分化し、村民のデイリーリズムが職業と関連して多様化した点が挙げられる。

2) 技術の習得

農業時代には、農民は農業生産の知識と技能を次世代に継承してきた。一般的に商売や経営に関する知識は乏しい。しかし、観光業が発展してから、村民はサービス知識と技能を向上するため、必要なノウハウや技能、ネット宣伝の技術、観光記念品・土産品開発を学んでいる。

(4) 村の管理と運営の変化

農村で行われる管理は農業生産と行政管理であった。前衛村の行政管理の実態としては、村の

権威者による非科学的な個人思想によって執り行われている状況があった。内部権力の構造は体制エリートの村幹部と一般村民であったが、経済力によって影響力を有する非体制エリートも出現した。それゆえ村の管理が複雑になり、経済管理や企業管理が必要とされ、実際にその要素が導入された。このように管理体制が従来の社会主義の権威管理から、科学的なものに変化した。ルーラリティは社会関係の側面において農民が脱農傾向にあり、現代的な管理要素の導入などの特徴が確認できるものの、農村観光の管理にはアマチュアの特徴が残っている。

5. 結論

伝統的な農村地域においては、農業が生産空間と生活空間、社会関係の在り方を決定づけている。農村観光が導入されて以降、伝統的な農業は観光農業に転換した。観光業が拡大してくると、従来の農村と異なる都市的な要素が出現するようになった。それらの要素が農村地域に侵入する過程で、ルーラリティが再編されている。

第一に、生産空間と生活空間、社会関係の3側面において、各要素が相互に影響し合い、農村観光の発展過程でルーラリティが再編されてきた。社会発展によって、生産空間に対する認識が変化したことで、生産空間へ観光機能が付与され、農産物を中心要素とする農村観光が端緒をついた。また観光業の拡大に伴い、生産空間においては非農的な観光施設が整備されるようになったことで、生産空間の土地利用という指標から、ルーラリティの低下がみられるようになった。

生産空間における農村観光の拡大に伴って生じた宿泊需要の増加に対応するために、住宅が観光者向けに改築され、観光機能は生活空間へ流入した。観光者の需要を満たすため、住宅の間取りや内装、設備、庭園の景色、道路・並木修景などの指標において、都市的要素が進入したことで、ルーラリティの低下が進んだ。また、同時期に生産空間に高級宿泊施設が新たに整備された。

生産空間と生活空間における農村観光の拡大に伴い、村民の収入・職業構成は観光業への依存度を増し、村民関係やホスト・ゲスト関係、村の管

理・運営の指標においても、観光業との繋がりが強くなったことで、社会関係における新たな特徴も表れるようになった。

第二に、農村観光の進展に伴い、ルーラリティの維持において、新たな傾向がみられるようになった。前衛村において、従来から生産されていた水稲、アブラナの生産風景や、生活空間におけるかまどなどの存在がルーラリティの維持に重要な役割を果たしていた。一方、生産空間における生産物はローカルなものから非ローカルなものへと転換し、現在では後者によってルーラリティが維持されている。生活空間において、自然豊かな環境の下に存在している現代的な形式の家屋は、農村の新たな特徴となっている。これは伝統性と乖離しているが、現代都市が持たない特徴である点を考慮すれば、新たなルーラリティとして捉えることができる。

第三に、農村観光にとって、ルーラリティの低下は必ずしも悪影響を招くとはいえない。生産空間における人工的な観光施設の増加により農的用地の減少、現代な娯楽施設の建造、生活空間における家屋の増築による庭園の農的景色の消失、社会関係における農家経営の競争による村民関係の悪化など多くの問題が存在している。しかし、農村地域におけるルーラリティには、アメニティの欠如などのネガティブな要素が反映されていることも少なくない。ルーラリティが低下した背景には、そうした面の改善を通じて、農民生活と農村の魅力を向上させる取り組みが不可欠と認識されたいことは否定できない。

最後に、農村観光において、ルーラリティを重要視することと経済的利益の追求および村民の生活向上欲求は互いに競合し合っている。このメカニズムによってルーラリティの各評価指標の強弱が変化し、再編が進んでいる。■

【参考文献】

- Bramwell, B.(1994) : Rural tourism and sustainable rural tourism, *Journal of Sustainable Tourism*, 2, 1-6.
- 杜国慶 (2006) : 観光開発に伴う世界遺産「麗江古城」の変容. *アジア遊学*, 83, 145-159.
- Halfacree, K.(1995) : Talking about rurality : Social representations of the rural as expressed by residents of six English parishes, *Journal of Rural Studies*, 11 (1) , 1-20.
- Hoggart, K. and H. Buller.(1987) : *Rural development : a geographical perspective*, London : Routledge, 336p. (=岡橋秀典・澤宗則監訳 (1998) 農村開発の論理—グローバルゼーションとローカリティ. 古今書院, 373p.)
- 井口梓・田林明・ワルデチュック, T. (2008) : 石垣イチゴ地域にみる農村空間の商品化—静岡県増集落を事例として. *新地理*, 56 (2), 1-20.
- Ilbery, B. W. ed.(1998) : *The Geography of Rural Change*, London : Routledge, 280p.
- 菊地俊夫 (2008) : 地理学におけるルーラル・ツーリズム研究の展開と可能性—フードツーリズムのフレームワークを援用するために. *地理空間*, 1, 32-52.
- 菊地俊夫 (2012) : 大都市近郊の横浜市青葉区寺家地区におけるルーラリティの商品化. *観光科学研究*, 5, 23-33.
- 呉羽正昭 (1999) : 日本におけるスキー場開発の進展と農山村地域の変容. *日本生態学会誌*, 49, 269-275.
- Lane, B.(1994) : What is rural tourism. *Journal of Sustainable Tourism*, 2, 7-20.
- 李紅波・張小林 (2015) : 郷村性研究総述と展望. *人文地理*, 30 (1), 16-20.
- 龍花楼・張杏娜 (2012) : 新世紀以来郷村地理学国際研究進展及啓示. *経済地理*, 32 (8), 1-7.
- 森下裕之・宮崎猛 (2008) : 中国における棚田農業の保全と農家楽—雲南省元陽県土戈寨村を事例として. *農林業問題研究*, 44 (1), 256-261.
- OECD(1994) : *Tourism Strategies and Rural Development*, Paris : OECD, 94p.
- 席建超・趙美風・葛全勝 (2011) : 旅游地郷村聚落用地格局演变的微尺度分析—河北野三坡旅游区苟各莊村的案例实证. *地理学報*, 66 (12), 1707-1717.
- 肖佑興・明慶忠・李松志 (2001) : 論郷村旅游的概念和類型. *旅游科学*, 3, 8-10.
- 山田耕生 (2008) : 日本の農山村地域における農村観光の変遷に関する一考察—「グリーン・ツーリズム」登場以前の1992年まで. *共栄大学研究論集*, 6, 13-25.
- 張小林 (1998) : 郷村概念辨析. *地理学報*, 53 (4), 365-370.

The Development of Rural Tourism and Rurality in the Suburbs of Metropolis:

A Case Study of Qianwei Village in Chongming District, Shanghai

LU Shuai

In China rural tourism has been rapidly developed from the late 1980s. As a result, the landscape, living environment, industry, and social relations have changed. Thus the rurality which is the core of rural tourism has been reorganized. Based on the indicators of rurality that were noted by Lane (1994), this study analyzes the change in indicators from production space, living space, and social relations for the case of Qianwei Village in Chongming District, Shanghai.

Rural tourism developed because the tourism function of the agricultural landscape was recognized in the village of Qianwei in the 1990s. Due to the expansion of tourism functions, there are also urban tourist facilities as well as agricultural tourism facilities. Therefore, agricultural land use decreased in the index of land use, and rurality was lowered. On the subject of tourism in the production space, the preservation of traditional agricultural produce maintained rurality. Meanwhile, the new agricultural produce and landscape crops which were not local give rurality some new features. In addition, urban sightseeing facilities and contemporary accommodation damages rurality. On the other hand, traditional production and lifestyle culture are utilized, and the sightseeing facilities constructed which reproduce traditional culture can maintain rurality to a certain degree.

Due to the expansion of tourism activities in the production space, farmhouses called “Nongjiale” which was used to provide lodging and food developed. The tourism function developed in the living space. Houses and village landscapes where villagers live are changing. The urbanization of the facilities of the guest room, roads, and street tree lowered rurality in these indexes. However, these changes had the effect of improving rural life and promoting the attractiveness of rural areas. On the other hand, in order to entertain more tourists, the decline of the natural landscape of the garden due to the extension and commercialization of billboards and the reduction of rurality in these indicators are obstructing rural tourism. Meanwhile, because of the development of the economy, “Villa” style houses became attractive new facilities, and are attracting new features in rural houses.

With the development of rural tourism, the income and employment structure of rural areas connected with agricultural production have strengthened. The income of villagers has increased, but conflicts among farmers caused by competition appeared. On the other hand, they were also introducing tourists to relatives or friends. Moreover, the intimate relationship with traditional hosts and guests in rural areas is an important attraction for tourists. However, due to the increase in tourists, especially in the large scale “Nongjiale,” the connection became less. Moreover, the village people's life rhythm changed from agricultural influence to tourism. In this way, in the index of social relationships, there are some new features with rurality, despite the reduction in rurality.

In this way, rural tourism has developed with the influence of each element on the production space, the living space, and social relations, and rurality has been reconstructed.

Keywords: rural tourism, rurality, production space, living space, social relations